

# 平成 31 年産 美里地区の大豆情報



第 1 号 平成 31 年 4 月 1 日

宮城県美里農業改良普及センター

TEL:0229-32-3115

FAX:0229-32-2225

<http://www.pref.miyagi.jp/site/misato-index/>

## 1 平成 30 年産大豆について

### ○管内の実績

表 1 品種別播種面積

	タチナガハ	ミヤギシロメ	あやこがね	タンレイ	その他	みどりの全体
播種面積(ha)	1,189	311	16	13	0.4	1,529
割合(%)	77.7	20.3	1.0	0.8	0.2	

表 2 品種別実績

	タチナガハ	ミヤギシロメ	あやこがね	タンレイ	その他	みどりの全体
生産量(袋:30kg)	68,370	17,193	483	361	272	86,679
反収(kg/10a)	195	182	210	200	160	193
1 等級割合(%)	65.2	61.9	85.5	0.0	83.8	64.4

(みどりの農協 平成 30 年産 大豆買入実績表 (総括) より)

### ☆作柄に与えた要因

(標播)

- ・ 7 月までの高温多照傾向により初期の生育が旺盛で過繁茂となった。後期の生育量の増加は平年よりも少なかったものの、成熟期の総節数は平年並みとなった。タンレイ及びミヤギシロメは、過繁茂による受光体勢の悪化を強く受け、着莢節数及び有効莢数が平年を下回り、子実重も平年を大きく下回った。タチナガハは、有効莢数は平年を上回ったものの百粒重が平年を大きく下回り、子実重は平年並みとなった。
- ・ 外観品質については、未熟粒が多く、粒形や粒大、色などのばらつきが大きくなりました。要因として、過繁茂による受光態勢の悪化により子実の成熟のバラツキが大きくなったものと思われる。

(晩播)

- ・ 播種後から 8 月中旬までの高温多照傾向により分枝が発達し、生育量は平年をやや上回って推移した。成熟期の総節数は平年並みに確保されたが、着莢数から莢伸長期 (8 月下旬から 9 月上旬) の寡照や多雨により着莢節数は、有効莢数、莢当粒数が減少した。補償作用により百粒重は平年を上回ったが、子実重は平年を下回った。
- ・ 外観品質は、標播と同様に悪かった。

## 2 平成 31 年産に向けて

### (1) ほ場の準備

#### ①排水対策 排水性の良いほ場をつくり、適期作業につなげましょう。

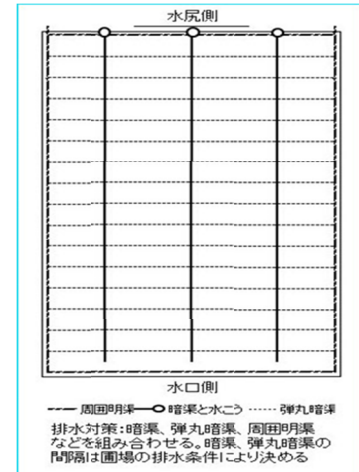
排水性が悪いと根が張らず、大豆の養水分の吸収が阻害されてしまいます。暗渠や明渠、補助暗渠等を組み合わせ、適切な排水対策を行いましょう。明渠を掘る場合には、確実に排水口につなぎ、停滞水がスムーズに排出されるようにしましょう。

#### ○地表排水…額縁明きよ、基幹明きよ

明きよは、10～30m間隔、深さ20～30cmで施工します。排水の悪いほ場では、間隔を5m以内とします。確実に排水溝につなぐようにしましょう。

#### ○地下排水…本暗きよ、補助暗きよ（弾丸暗きよ）

弾丸暗きよは、本暗きよと直交するように2～3m間隔で、地表から40cmの位置に施工します。



#### ②土づくり 有機物・石灰・リン酸の施用による土づくりを行いましょ

大豆は地力を消耗する作物です。作付け頻度が高くなると地力が消耗し、低収や小粒化の原因となります。また、土壌の酸度 (pH) が適正值 (pH6.0～6.5) より低いことや、リン酸、石灰分の不足が低収の要因となっていることもあり、適切な土づくりと施肥管理が重要となります。

大豆が吸収する窒素の多くを根粒菌による窒素固定に頼っていることから、大豆の増収には、根粒菌の着生と活性の維持も重要なポイントとなります。根粒菌の着生には、リン酸や塩基が多く、土壌酸度が微酸性～中性 (pH6.0～6.5) で腐食に富んだ土壌が適しています。

#### ③施肥

表 3 基肥施肥量の目安

栽培様式	播種期	基肥成分量 (kg/10a)		
		窒素	リン酸	加里
標播	5月下旬～ 6月上旬	1.5～2	5～6	6～8
晩播	6月中旬～ 7月上旬			
晩播(麦後)	6月中旬～ 7月上旬	2～3	6～9	8～12

※麦稈をすき込む場合

### (2) 播種 各品種の特性に合わせ、適期に播種しましょう

表 4 品種別播種様式

品種名	栽培様式	播種期	播種量 (kg/10a)	播種様式		栽植本数 (本/10a)
				条間	株間	
タチナガハ	標播	5月下旬～6月上旬	3.3～4.4	75～80cm	20～25cm	10,000～13,300
ミヤギシロメ	標播	5月下旬～6月上旬	3.8～5.1	75～80cm	20～25cm	10,000～13,300
あやこがね	標播	5月下旬～6月上旬	3.1～4.1	75～80cm	20～25cm	10,000～13,300
		6月中旬～6月下旬	4.1～5.9	70～75cm	15～20cm	13,300～19,000
	晩播	7月上旬	5.5～5.9	70～75cm	15cm	17,800～19,000
タンレイ	標播	5月下旬～6月上旬	3.6～3.9	75～80cm	20cm	12,500～13,300
	晩播	6月中旬～7月上旬	5.2～8.3	70～75cm	10～15cm	17,800～28,500

(3) 中耕・培土

梅雨時期にあたるので、計画的に作業を実施しましょう

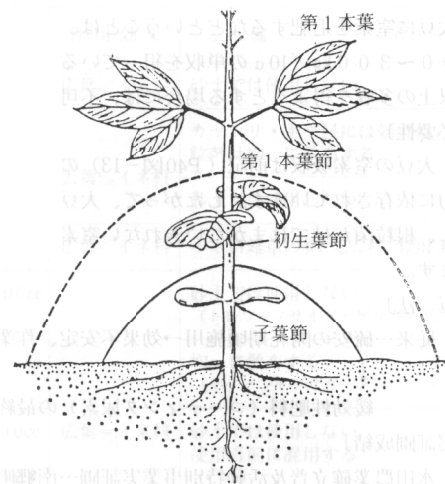


図1 中耕培土の目安

普通栽培

- 1 回目：本葉 2～3 葉期に子葉節がかくれる高さまで
- 2 回目：6～7 葉期に初生葉がかくれる高さまで

晩播栽培（麦後）

- 本葉 5～6 葉期に子葉節が隠れる程度の高さまで

※不定根の発生による生育促進，増収，倒伏防止，土壤通気性・排水性の改善，除草等の効果があります。

※遅い時期の中耕・培土は，主茎や分枝の損傷，断根により生育に支障をきたすため，遅くとも開花の10日前までに終わるようにしましょう。

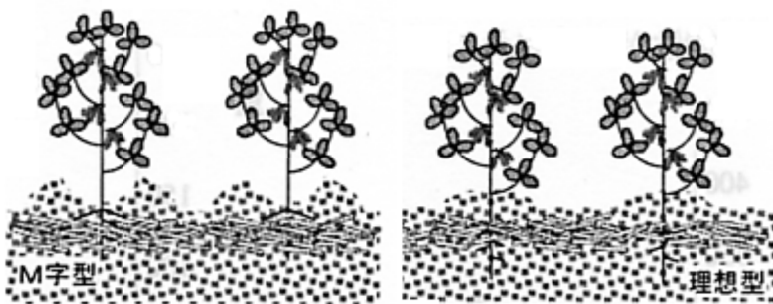


図2 中耕の模式図

※株元に土が寄らないM字型培土は逆に悪影響となることがありますので，作業機の調整・速度に注意しましょう。

(4) 雑草防除

雑草対策の第一は大豆の生育を良好にすることです

<基本の防除体系>

大豆播種	大豆 2～3 葉期	大豆 5 葉期	大豆 6～7 葉期
土壤処理剤	→ 茎葉処理剤	→ 中耕培土	→ 中耕培土

※大豆バサグラン液剤の処理適期は，大豆 3 葉期です。

（アサガオ類などの難防除雑草については，大豆 2 葉期）

<土壤処理剤について>

土壤表面の碎土率が高く，かつ，適度に湿り気のある条件で効果が高く安定します。碎土率を高めるよう努めましょう。

出芽している雑草には効果が薄いので，播種後間を開けずすぐに散布することが重要です。

<草種ごとの対策について>

草種	対策
広葉+ヒエ	大豆バサグラン液剤+ポルトフロアブル
ツユクサ，クサネム	バサグランが効きづらいので，中耕培土や非選択制除草剤の畦間・株間散布を組合わせて対応する。
雑草少発生	中耕培土で対応する。



シロザ



ツユクサ



クサネム

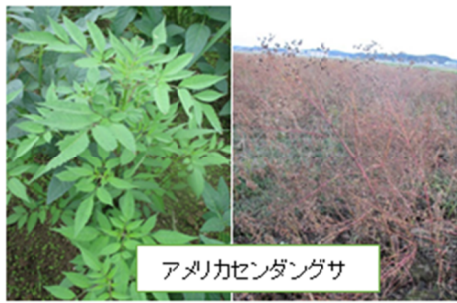
草種	対策
タデ類, キク科 (アメリカセンダングサ, オナモミ等), アブラナ科, イチビ	効果の高い大豆バサグラン液剤の散布。



タデ



イチビ



アメリカセンダングサ

草種	対策
ホソアオゲイトウ, イヌホオズキ	葉齢が大きくなると大豆バサグラン液剤の効果が低下する。発生時は、大豆バサグラン液剤散布早限 (大豆2葉期) に達したら即散布する。残草した場合は、つり下げノズルによる畦間・株間処理で対応する。



イヌホオズキ



ホソアオゲイトウ



草種	対策
帰化アサガオ類, アレチウリ	3~4葉期までであれば効果があるが、つるが発生してしまうと、それ以降に大豆バサグラン液剤を散布しても効かない。発生時は大豆バサグラン液剤散布早限 (大豆2葉期) に達したら即散布する。残草は、つり下げノズルによる畦間・株間処理で対応する。



＜難防除雑草の防除体系＞

近年発生が増えているアレチウリや帰化アサガオ類は、つるが絡みついて防除が非常に困難な雑草です。雑草種子が出芽後 2~4 週間でするになり、大豆の生育期間中に次々と長く発生するため、何度も防除を行う必要があります。

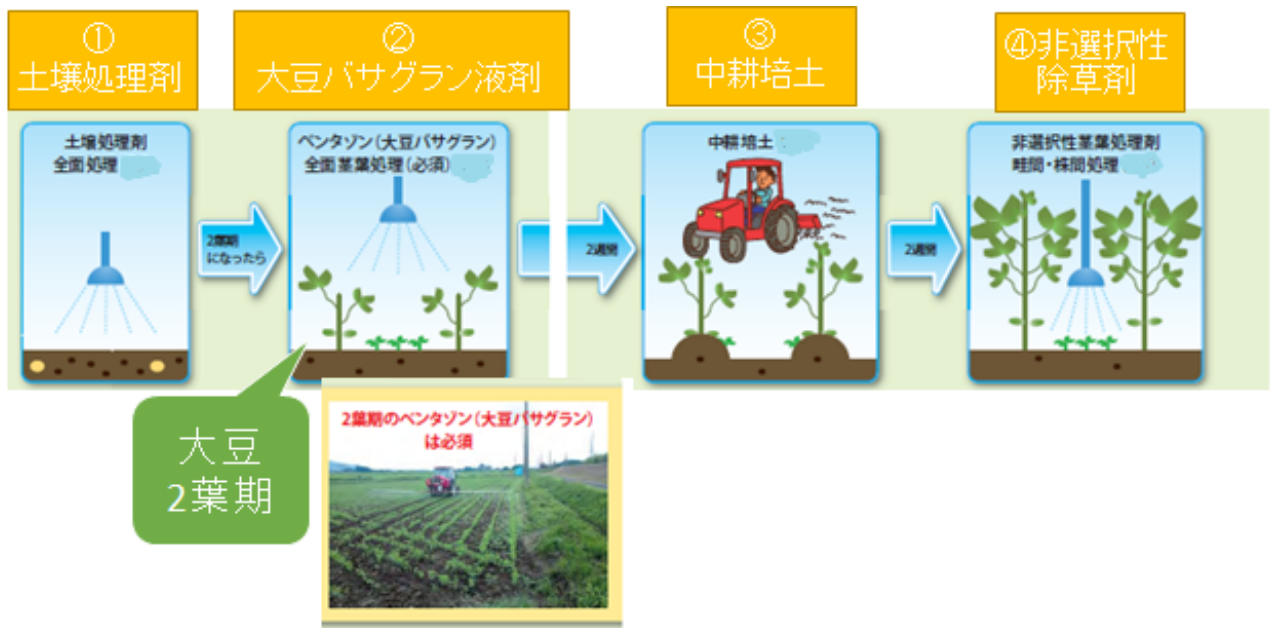


図3 帰化アサガオ防除体系（農研機構 「帰化アサガオ類まん延防止技術マニュアル」より）

#### (5) 播種前から生育初期の病害虫防除

紫斑病，茎疫病，黒根腐病，アブラムシ類，フタスジヒメハムシ，タネバエ等の防除のため，前年に発生した病害虫を考慮して必ず種子消毒剤を使用しましょう。

記載している農薬情報は，平成31年4月1日現在のものです。使用に当たっては，最新の登録情報を確認の上，周辺のお作物への飛散等に十分注意してください。